

研究会に期待すること

愛知大学 坂東 昌子

まだみなさん全員がお集まりというわけではないんですけど、私の話はどうせ前座ですので、早くから始めておいていいかなと思っております。

今年は3回、3日間、「学問の系譜」という研究会をやらさせていただきます。これはそもそも、湯川・朝永年にちなんで、先輩、先人たちが開いてこられた学問を、どういうふうに受け継いで、若い人たちがどういうふうに元気が出るかというようなことを目的にして、やっております。

私は、湯川精神のスケールというのは、四つぐらいに分けられると思っています。素粒子論の湯川理論ですね、そういうものの提唱から、それだけではなくて、それも関係したのだと思うのですが、新しい学問への挑戦ということで、宇宙とか生物とか、そういう物理学がカバーしている領域を、大きく広げられたというのが、もう一つの科学の精神だったかなと思うのです。

もうちょっと広く、科学的精神を考えてみますと、やっぱり湯川先生は、よく科学と社会の関係を考えられたと言いますけれども、これはやっぱり、科学者として考えられたのであって、やっぱりそういう、科学者としての精神が核廃絶、このあいだ、ちょうどNHKで、先生の一生のお話がありましたけれども、そういうところへ、どういうふうに広がっていったのか、科学者としてはどうだったのかということから、やっぱり最近は言われていないのですけれども、もうちょっと先、つまり科学として、人の進化というなかで科学と社会を考えていくというようなところまで、いかれたんじゃないかと思っています。

この研究会では、どちらかというと、狭い素粒子・原子核の領域から、広い学問の世界へ挑戦していた湯川先生の系譜を辿りたいと思っています。

1回目に比べまして、少し今回は分野を広げております。これを広げるに際しては、どれを取り上げるべきかというのはなかなか難しく、コアの部分の、もちろん素粒子、物性、原子核、こういう部分も入れているのですけれども、それにやっぱり広がっていった、そして新しく挑戦しようとしている精神、そういうようなものを持っていらっしゃる方に、できるだけ話していただいて、みんなが刺激を受けるというふうにしたいと。

ある先生、大野先生ですけれども、大野先生が、「この研究会は年寄りが多いから、こんな話も通じるでしょう」というようなことをおっしゃったのですけれども。

大野：それは私が言ったんじゃない。

坂東：誰かがおっしゃったので、それならこれでもいいかなというようなお話をされてしまったので。

大野：それでいいと言われたのです。私の意見ではありませんので。

坂東：はい、わかりました。すみません。

しかし今回は、わりに若い方も来ておられますので、ぜひ刺激を受けていただきたい。やっぱりどういうふうにして、いろいろと苦労しながら、新しい領域をつくっていつているのかというお話が聴けるのではないかと思っています。

プログラムはそこにあります。これについて、いちいち解説はいたしません、だいたい三つぐらいに分けられます。一つはコアの研究の現在の発展、そういう意味では、今日の素粒子とか、そういうものを含めてですね、少し若い人たちが何を考えているかということも、聴かせていただこうと思っています。

もう一つは、物理学のなかでの、もう少し広がった部門ということで、新しく学問を開拓してきたようなお話。

それから、最後の日に特にありますけれども、今日は宮田先生もお見えになっておりますけれども、宮田先生というのは、私は全然、物理のこの基研とは関係ないと思っておりまして、ホームページを拝見しますと、どうも基礎物理学研究所におられて、そして湯川先生に encourage されたというお話を聴きまして、やっぱりすごく広い範囲で。実は今日、学術情報メディアセンターの方々に、撮影に来ていただいているのですけれども、情報学に対しても、非常に湯川先生にエンカレッジされたそうで、情報学の歴史の話をこのあいだお聴きしましたら、一番最初に湯川先生が出てきたので、びっくりしたということもあまして、そういう意味で、宮田先生に、そういうお話をさせていただけるんじゃないかと思っています。

講演者のご紹介については、ショートバージョンとロングバージョンをつくっておりますが、もし講演者とか座長の方のお許しが出ましたら、そのバージョンも、みなさんに参考のためにお渡ししたいと思います。

一つだけちょっと、ご紹介しておきたいのは、去年、大沢先生に、生物物理のお話をいただきました。そうしましたら、ラブレターがきまして、あのおかげで、すごく刺激を受けた。先生は80歳を越しておられるんですよ、確か。すごく刺激を受けて、それも含めて、ちょっと新しい書き物を書いたので、欲しい人があったら渡してくださいということで、預かっております。そこには、昔、湯川先生が、生物は積み木細工だねって言われたのに対して、ずっとそれを、どういうふうに打ち破るかということで、研究されてきたのですけれども、去年の研究会で、南部先生が、生物のソフトはどうなっているんですかといわれた。またこれがずっと引っかかって、それがこの本になったようです。そういう意味で、若い人だけではなくて、年寄りも刺激を受けているという、面白い研究会になっているのではないかと思います。

最後なのですけれども、ちょっとそこに書いてありますように、今日は学術情報メディアセンターの方々に撮影をお願いしております。去年と同じように、これはビビッドな現状、臨場感溢れる報告書を出したいと思っておりまして、実は去年の報告書は、全部売り切れまして、あと、『物性研究』にも載せたので、『物性研究』というかたちで増刷してあるのがあるくらいで、なくなっていました。

面白いことには、いろいろな批判もいっぱい聴きました。「こんなことだけ取り上げるのはけしからん」とか、いろいろとありまして、私もいろいろと勉強になりました。さっき田中先生とお話していたら、「反論があるということは、読んでくれたということだから、いいことだ」と言ってくださいましたけれども、できるだけ、これを後世というか、若い方々にも伝えて、やっぱりこの日本のなかで、どうやってこの物理学が発展してきたか、これからどう発展すべきかというようなことを考えていける、足しにしたいと思っています。

実は昨日、EPSの会長の方が京都に来られていて、少しお話したのですけれども、やっぱりヨーロッパ連合ができてから、ヨーロッパにはいろいろな学会がありますね、それが連合して、新しい方向を模索しているようでありまして、日本の物理学会とは違って、すごく広い視野で、いろいろなことを考えているということをおうかがいして考えさせられました。

やっぱり、われわれは狭い視野になりすぎているのではないかなと。そういうものを一度、ぱっと広げてみて、そしてまた自分の研究に打ち込んでいくというのが、大事なのではないかということですのですすめていきたいと思っています。今日は橋本さんが、若い代表として、最初に話してくださいませけれども、あとはもう、できるだけ、講演者だけではなくて、みんなの議論が大事ですので、どうか忌憚のないご意見をいただいて、そして若い人にメッセージを残してあげようと思います。よろしくお願いします。